

研究員紹介
岡宮久規主任研究員
岡宮久規

2022年10月にふじのくに地球環境史ミュージアムに着任した岡宮久規です。主に南アルプス地域のフィールド科学を担当します。専門は両生類の生態学で、トウキョウサンショウウオの生活史形質にみられる緯度ラインの研究で学位を取得しました。

私は東京23区の西の端、杉並区の荻窪で育ちました。当時の荻窪周辺はすでに住宅地でしたが、住宅の合間にはかつての武蔵野の情景を偲ばせる畑や社寺林が残存しており、そこが幼少期の遊び場になっていました。まだ2歳か3歳のころ、ジャコウアゲハをわしづかみにした時にべったりと手についた鱗粉の感触は原体験として今でも覚えています。中学高校では生物部に所属し、野外に出かけてはヘビやカエルを捕まえてきて飼育していました。野外の観察から始める今の研究スタイルはそのころ培われたように思います。

進学した明治大学農学部の3年時に研究室に配属され、初めて研究の一端に触れました。研究テーマはカエルの産卵場所の選好性というありふれたものでしたが、いままで何となく見てきた自然を定量的な形で記録に残すにはどうしたらいいかということを実験に考える機会になりました。大学院からは首都大学東京（現東京都立大学）の動物生態学研究室に進み、修士のテーマでは両生類の野外孵化率の地理的変異を調べました。これ以降、地理的パターンが自身の中心テーマの一つとなっていきました。

学位取得後は北海道大学の岸田治准教授に誘われる形で北海道に移り、苫小牧研究林に常駐してエゾサンショウウオの表現型可塑性や北海道に導入された国内外来種であるアズマヒキガエルの影響評価に関する研究を行いました。まだ残雪の多い早春の森に学生と出掛け、実験に使うカエルやサンショウウオの卵をバケツ一杯採ってきたり、ヒグマの気配に脅えながら夜通しエゾサンショウウオの繁殖活動を観察したり、北海道の雄大な自然を堪能しながら研究をすることが



写真1 幼少期、家の周りのちょっとした緑地が自然との出会いの場所でした。



写真2 昔も今も野外で観察することから研究がはじまります。

できました。その一方で、こんなことをいつまで続けられるのだろうという不安も募っていきました。そんな折、ふじのくに地球環境史ミュージアムに拾ってもらった形で静岡に移ってきました。

「この研究をして何の役に立つのですか？」基礎研究をやっているとよく聞かれる質問です。基礎資料の価値を力説したり、役に立たない研究ができることにこの国の豊かさがあるんですよと開き直ってみたりしましたが、最近はむしろ何の役にも立たない方が難しいのではないかな、と思うようになってきました。自分の興味の赴くままに研究を進めてきましたが、その成果が他の論文や書籍、テレビ番組で紹介されたり、さらにそれを見た方から相談を受けたり、思いがけない形で世の中と繋がる経験が何度もありました。静岡でも、今まで通り興味の赴くままに研究に取り組み、その結果として皆様のお役に立てることがあれば、これに勝る喜びはありません。